

國學院大學學術情報リポジトリ

林謙三と郭沫若：『隋唐燕楽調研究』誕生秘話

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山寺, 三知, Yamadera, Mitsutoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000221

林謙三と郭沫若

— 『隋唐燕楽調研究』 誕生秘話 —



山寺三知

一、はじめに

この写真は、昭和十一年（一九三六）の夏、彫塑家で、東洋音楽研究者として著名な林謙三¹（一八九九—一九七六）のアトリエで撮影されたものである。右が林謙三、彫像を挟んで左側は、当時日本に亡命していた、中国の文学者・歴史学者、そして政治家としても知られる郭沫若（一八九二—一九七八）である。郭沫若の左右に見える二体の彫像は、林謙三が、自身の著作『隋唐燕楽調研究』²を中国語に翻訳した郭沫若に対して、

謝意と敬意を表すために制作した郭沫若像である。このとき、林謙三、三十七歳、郭沫若、四十三歳。『隋唐燕楽調研究』は、この年の十一月、上海の商務印書館から刊行されたが、本書の出版により、林謙三は本格的に音楽研究へと踏み出し、それと同時に彼は、日本のみならず、中国の音楽学界に名を馳せることになり、そして、本書は後の東洋音楽研究に多大な影響を及ぼし、不朽の名著となる。

だが、郭沫若はこの後一年も経たぬうち、忽焉と日本から姿を消し、それまで十年あまり続いた二人の交遊は終わりを告げるようになったのである。

林謙三と郭沫若、二人は分野も生き方も全く異なるが、それぞれの世界において巨大な足跡を残した、言わば「巨人」である。若き二人の偉才は、いかにして出会い、交流し、後世に残る名著を生み出したのであろうか。知られざる林謙三と郭沫若の交遊の軌跡を辿ってゆくこととする。

二、林謙三の略歴

まず、林謙三の略歴^③について一瞥しておきたい。

林謙三（本姓長屋、林は旧姓）は、明治三十二年（一八九

九）五月一日、石川県士族の次男として大阪に生まれた。中学校の頃から、日本美術史や彫刻に興味を持ち、高村光雲門下の田中祥雲に木彫を学び、進級できなくなるほど熱中したという^④。大正八年（一九一九）九月（二十歳）、東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）彫刻科塑造部に入學、建昌大夢に學び、大正十三年（一九二四）三月（二十四歳）卒業、同年から昭和八年（一九三三、三十四歳）にかけて帝展（帝国美術院展覧会）に、大患で病床に伏していた昭和七年を除き、毎回入選、その後も、文展（文部省美術展覧会）、日展（日本美術展覧会）等で活躍した。

昭和二年（一九二七、二十八歳）には、創作活動を継続するかたわらで、東洋古典音楽の探求熱が高まり、翌昭和三年（一九二八、二十九歳）から東洋文庫に通いはじめ、東洋古典音楽の資料を渉猟、そこで郭沫若と出会い、以後十年にわたり親交を深めた。

昭和十一年（一九三六）十一月（三十七歳）、『隋唐燕楽調研究』を上海の商務印書館より刊行、翌昭和十二年（一九三七）七月（三十八歳）に、郭沫若が突然の帰国。その頃より、敦煌琵琶譜や五絃琵琶譜など古楽譜研究に取り組みはじめたが、昭和二十年（一九四五）四月（四十五歳）、空襲にあい、西ヶ原

（現在の東京都北区）の家とともに楽器・図書を焼失、戦後、奈良に移り住んだ。

昭和二十三年（一九四八、四十九歳）より、芝祐泰らと正倉院楽器の調査研究に従事、昭和二十五年（一九五〇）一月十四日（五十歳）には、昭和二十四年度朝日文化賞を「東洋古代音楽の研究と正倉院古楽器の復元」によって受賞した。⁶

昭和二十六年（一九五二）四月（五十一歳）に、奈良学芸大学（現奈良教育大学）教授（彫塑）、昭和四十年（一九六五）三月（六十五歳）に定年退官の後、同年四月（六十五歳）には、布施女子短期大学（現東大阪大学短期大学部）教授に就任。昭和四十七年（一九七二）十月（七十三歳）より、東洋音楽学会副会長を務めた。昭和五十一年（一九七六）六月九日、永眠、七十七歳であった。

彫刻では、奈良に移り住んでからも、彫塑文化協会を結成し、奈良の彫刻界に新風を送りこみ、後進の育成に尽力、県展（奈良県美術展覧会）でも活躍した。

東洋音楽に関する主な著書を年代順に挙げると、『隋唐燕楽調研究』以降、『明楽八調研究』（張虔訳、上海・音楽出版社、一九五七年六月。五十八歳）、『敦煌琵琶譜的解読研究』（潘懷素訳、上海・音楽出版社、一九五七年九月。五十八歳）、『東亜

楽器考』（錢稻孫訳、北京・音楽出版社、一九六二年二月。六十二歳）、『正倉院楽器の研究』（東京・風間書院、一九六四年六月。六十五歳）、『天平・平安の音楽—古楽譜の解読による—』（監修・解読・解説。東京・コロムビア・レコード、一九六五年十月。六十六歳。同年、本レコードにて芸術祭奨励賞受賞）、『正倉院の楽器』（共著。東京・日本経済新聞社、一九六七年十月。六十八歳）、『雅楽—古楽譜の解読—』（東京・音楽之友社、一九六九年十二月。七十歳）、『東アジア楽器考』（東京・カワイ楽譜、一九七三年。七十三歳）等があり、それらの内容は楽理、楽器、楽譜等多岐にわたるが、いずれも斯学の名著である。

林謙三が郭沫若と出会ったのは、二十八歳のことで、帝展に四回連続で入選を果たすなど、彫塑界で華々しく活躍をする一方、まさに東洋古典音楽に目覚めた時にあたる。その後、郭沫若との十年の交遊を経て、『隋唐燕楽調研究』を刊行、それ以降、彫塑家として活躍しながらも、次々と東洋音楽に関する数々の名著を世に送りだしてゆくのである。

三、郭沫若との交遊

郭沫若の経歴等はあまりにも有名であるので贅言を避け、林謙三の随筆「郭沫若」^⑦に沿いながら、そのほかの資料を併せ見ることに、林謙三と郭沫若の交遊の軌跡をたどってみた。

郭沫若は、昭和三年（一九二八、郭氏三十五歳）に蒋介石からの弾圧を逃れ日本に亡命したが、それから、昭和十二年（一九三七、郭氏四十四歳）に日本を脱出し、抗日戦線に参加するまでの約十年間、千葉の市川で家族とともに暮らした。林謙三と郭沫若との交遊は、まさしくこの十年間にあたる。

（一）学術的交流

随筆「郭沫若」には、郭沫若との出会いについて次のように見える。

郭氏が亡命した昭和三年の春も逝く頃のこと、私は東洋文庫で白哲温容の一中国人が甲骨金石文献を渉猟しているのに気をひかれ、いつか言葉をかけるようになった。それ

が郭氏と前後約十年にわたる淡々たる交遊の始まりである。

昭和三年（一九二八）、林謙三、二十九歳、郭沫若、三十六歳の春であるが、「林謙三先生年譜・業績目録」によれば、東洋文庫に通い始めたのは五月頃とのことである。郭沫若が来日したのは二月下旬であるから、その約二、三か月後ということになる。^⑧このころ郭沫若は甲骨金文研究に没頭しており、自然と二人は互いに学問について語りあうようになったのである。

私達の対話は大抵相互の研究に關していた。新発見を子供のように眼を輝かして説く郭氏の表情の何んと素直だったこと！耳の遠さ^⑨も鋭い理解力がそれを補い、後進の意見でもとるべきものはとり、私のささやかな説すら「甲骨文字研究」の片隅に紹介を惜しまなかったほどである。

『甲骨文字研究』を確認すると、林謙三の説は次のように紹介されている。

中国がギリシャと関係していたことは、別の文献によって

も証明される。例えば、楽器の「吹簫」はTubaの対訳で、「屠鑿角」はTubaの対訳である。¹²

日本の友人
林謙三の訃文

『甲骨文字研究』は、二人が出会ってから三年目にあたる昭和六年（一九三一年、郭氏三十八歳、林氏三十二歳）に出版されるが、近年の研究によると、郭沫若紀念館に所蔵された同書の手稿本の序録の末尾には、当時、東洋文庫の主任であった石田幹之助（一八九一—一九七四）への謝辞とともに、益友¹³ 林謙三に言及した一段が見えるという。

同じく東洋文庫で研究していた林謙三氏とは、いつしか益友となった。林氏は日本の青年彫刻家で、彼の研究テーマは漢時代の中国と西洋の芸術交渉であり、特に音楽を主眼としていた。くつろぎのひとつには、得たところについてしばしば議論し合い、いつも楽しくて疲れを忘れたものである。私は林氏の発奮に深く感じ、知らず知らずのうちに励まされたことは少なくない。今、筆を擱くにあたり、彼の研究がいち早く完成するのを目にしたいと希望するものである。¹⁴

この一段は、石田幹之助への謝辞とともに、出版の際には削除されたが、この記述から、郭沫若が林謙三の研究姿勢に触発されて、『甲骨文字研究』を書き上げたことが窺える。郭沫若は、『甲骨文字研究』『釈干支』において、十二支の起源がバビロニアにあることを論じているが、東西の芸術交渉を研究する林謙三との語らいから、何らかの着想を得ていたのであろう。『隋唐燕楽調研究』の郭沫若「序」に「彼の為人や求学的態度は私の感佩するところである。彼の為人は謙和にして、学問は極めて真摯¹⁵」ともあり、郭沫若にとって林謙三は、学術研究上の敬服すべき友であったのである。そして、林謙三もまた、「その人の広い深い学問上の智識に接して私の研究がどれほど豊かにされたか計り知れません」と言い、郭沫若の深大な学問によって啓発されたことを述懐している。

また、ここには、林謙三の研究テーマが、音楽を主体とした『漢時代の中国と西洋の芸術交渉』であることが記載されているが、このことは『隋唐燕楽調研究』の郭氏「序」に「林氏には本書以外にも『西域音楽東漸史』の大作があり、已に脱稿しているが、尚お整理が待たれる」とあることも関係があるかと想像される。この「西域音楽東漸史」は未発表であり、草稿も存在せず、その実態は明らかではないが、いずれにしても、

これらの記述から、林謙三は、初期のころには東西音楽の交渉に関心があつたことを窺い知るのである。¹⁸⁾

そのほか、二人の交流は、郭沫若の金石学の弟子である、殷塵（金祖同、一九一四—一九五五）の『郭沫若帰国秘記』にも見出すことができる。本書には、一九三七年七月七日の盧溝橋事件から、一九三七年七月下旬に郭沫若が日本を脱出するまでの行動が事細かに描かれているが、次の一節は、その一年前の回想の一部である。

その時は、わたしと鼎堂とは、林謙三という美術家のところに行き、かれに頼んで「石鼓文」の写真を撮ってもらった。また映画用のフィルムに撮って、それを引き伸ばしてもらった。林氏の友人が化学研究所で働いているので、われわれの費用は少なくてすんだ。¹⁹⁾

一九三六年（昭和十一年）夏（郭氏四十三歳、林氏三十七歳）、郭沫若は、篆刻家で金石学に精通していた河井荃廬（一八七一—一九四五）から石鼓文の拓本を借り、林謙三にそれらの撮影を頼んだのである。この時期は、『隋唐燕楽調研究』出版の直前にあたり、まさしく冒頭に掲げた写真を撮影した時期と一致

しているのである。

また、『隋唐燕楽調研究』の一九三六年三月三日付の郭氏「序」には「初稿訳成後も、原著者と訳者は更に八、九か月間の長期にわたる推敲や増改を経た²⁰⁾」とあり、同年二月十九日の「原作者序」にも「初稿訳成後数ヶ月にわたり刪正増修した箇所は枚挙に遑がない²¹⁾」とあるのを見ると、一九三五年（昭和十年）から一九三六年（昭和十一年）にかけて、二人は相当頻繁に往来していたと想像され、石鼓文の撮影も、そのような交流での一齣であつたと思われる。

なお、殷塵は林謙三の肩書きを「美術家」としているが、当時の林謙三は、まだ音楽に関する業績がそれほど多くなく、²²⁾そのような実状を反映したもので、手稿本『甲骨文字研究』の序録で郭沫若が彼を「彫刻家」としていたことと一致するものである。

郭沫若が帰国後執筆した文章の中にも、林謙三の名は登場する。一九四六年に発表した史劇『筑』には、郭沫若自身による古楽器「筑」についての解説が附されており、その中に林謙三宅で古楽器を目にしたことが描かれている。

私はかつて日本に住んでいたとき、友人の林謙三君の家

で、一種の古楽器を見かけた。かなり太い竹を半分に割ったものから成り、長さは三尺たらず。背に絃が張れるようになっていた。絃はすでに朽ちて無くなっていたが、絃を張る装置はちゃんと残っていた。竹身は油のようなもので塗飾されていたらしいが、古竹の色がなお保たれていた。虫くいはあったが、さほどひどくはなかった。一方の端の底に近いふちに半月形の二つの穴が、左と右に一つずつ、あいていた。手および指で握るための穴であろう。今にして考えれば、この楽器こそ往昔の筑だったと思う。

当時林謙三宅にあった楽器類は、昭和二十年（一九四五、林氏四十五歳）の空襲で焼失したため、正確なことは明らかではないが、郭沫若が見た楽器は、太い竹を半分に割ったような形をし、底面に半月形の穴がある等の特徴から、筑ではなく、日本の八雲琴の類であったのではないかと想像される。

（二）日常での交流

随筆「郭沫若」には、日常における交流も描かれる。

文庫の帰り、ほど遠からぬ西ヶ原の自宅に招いたり、果て

は市川の寓居を訪ねたりした。その後移られた市川の第二の住居こそ私にはなつかしい交遊の舞台である。……交遊が個人的から家庭的に進展するにつれ世話好きな夫人の世話に与ったことは度々である。双方の家族連れで隣村へ梨狩りに誘われた楽しい日のこと、殊に末子の鴻君をおんぶして歩いた郭氏の和服姿が今も眼のあたりに思い浮ぶ。

家族ぐるみの交流の様子がうかがえる。西ヶ原とは、上述のとおり、現在の東京都北区西ヶ原にあたり、市川の第二の住居は、現在の市川市須和田に位置する。夫人とは、佐藤をとみ（一八九五—一九九四。中国名は、郭安娜）であり、鴻君とは、四男の志鴻（一九三一—）。後に中央音楽学院教授、ピアノ奏者となる）である。²⁴ 林謙三の家族は、「林謙三先生年譜・業績目録」によると、昭和七年（一九三二）四月（林氏三十二歳）に、長屋サトと結婚し、昭和十一年（一九三六、林氏三十七歳）六月に次女、那智子が生まれている。²⁵

時には昔語りに花が咲くこともあった。ペンネームの沫若は郷里の沫・若二つの川名に由来するが、これに郭姓を冠する誤りも通称となった今では致し方ないのだとか、若

い頃東京の市電で神保町をカミヤスチョウと得意気に云つて車掌に通じなかつた失敗談とかも聞いたし、近頃新聞にも見えた、例の刺身即ち中国の三滲論を自宅で刺身を御馳走した時に聞かされたように覚えている。

他愛のない話を飾らずに言い合えるほどに気を許しあつていたのであろう。

なお、ここに言う刺身論は、『朝日新聞』一九五四年十二月二十日朝刊、第七面（大阪版）の「郭沫若氏から贈物——亡命時代の文献を中日文化研究所へ——」と題する記事に見え、郭沫若が帰国時、日本に残した資料の中から発見された草稿の例として紹介されたものである。これは、一九三七年に出版された『沫若近著』（上海・北新書局。未見）において発表された「刺身」の草稿であるが、今、『郭沫若全集 文学編 第十八巻』（九四—九六頁）により脱稿の時期を確認すると、末尾に「一九三六年二月二日夜」と記されており、これは、郭沫若が『隋唐燕楽調研究』の「序」を書いた、一九三六年三月三日の約一か月前にあたる。郭沫若は、刺身の語源について、その頃考えついたことを林謙三に語ったのであろう。

郭氏はなかなかの能書家で、かつて私の求めて伍挙の「三年飛ばず鳴かず云々」の語意を寓した快心の書を贈られた。その折「孤高」の一幅を示し、私はこの言葉が好きですと云った。この一語はよくその頃の郭氏の心境を現わしている。ある時縁側に並んで立つて遠い空に向けた郭氏の眸に限りない寂しき、空虚さの湛えるのを感じたが、そんな折でも内心にははげしい孤高の意気に燃えていたのではなからうか。この人に「屈原」のすぐれた史論や史劇が書かれたのもさこそとかなずかれる。⁽²⁷⁾

林謙三は、いつからか、自らの庵名を「不鳴菴」と名付け⁽²⁸⁾るが、それは自身の境遇を擬えてのことであろうが、『史記』楚世家「蜚^とはず鳴かず」を踏まえた書を郭沫若から贈られ、それに対して、郭沫若は、自らの心境を「孤高」と表現したのである。林謙三は、異郷の地にあつて、激しい憂国の情をうちに秘めた郭沫若の姿を、孤高を貫いた屈原と重ね合わせる。多くを語らずとも互いの心境を感じあえる二人の様子が読み取れる。

また、『奈良学芸大学新聞』昭和三十年（一九五五）十二月、第四十三号、第二面の「十八年目の再会 郭沫若氏と林謙三教授 古楽研究でむすばれた友情」と題する記事には、林謙三の

言葉を引用して、

交友のずっと後になって、郭氏は自分の首に金がかかっているんだと話されたが、政治に関することは全く話されなかった。ただ当時魯迅、胡適氏と文学論 当時中国は抗日のための国防文学論戦²⁹にあけくれていた—で相当激しい斗志を示されていた。

とあり、郭沫若は誌上で激しい論戦を繰り返していても、林謙三の前では、政治的な話は一切しなかったという。それは、林謙三が「世事には割と無関心、常に学問の世界に厳しく生き³⁰」ていたことも無関係ではなからう。二人は、イデオロギーや利害関係ではなく、学問と芸術で結ばれていたと言えるのではなからうか。

(三)『隋唐燕楽調研究』の翻訳・出版の経緯

郭沫若による『隋唐燕楽調研究』の翻訳は、以上のような交流の中で生み出されたのであるが、彼が翻訳をすることになった経緯について、「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」（二九—三〇頁）には次のように見える。

交際が七年も続いた間に郭さんの仕事は驚くほど多量な立派な著書となって次々に世に現れました。それに比べて私の研究は相当進んではおりましたが、あまり特殊過ぎて日本で発表する機会がなかなか掴めそうにありませんでした。ある日、私がこの苦しみを郭さんに話したら、郭さんは自分から進んで「じゃ私が中国文に訳して中国で発表できるように努めてあげましょう」と申し出され私を狂喜させました。これが私の「隋唐燕楽調研究」と題する論文が世に出る始まりです。

郭沫若が林謙三のために自ら進んで翻訳を買って出たことがわかる。『隋唐燕楽調研究』の「原作者序」に「沫若先生は余が長年兄事する畏友であり、数年来の友誼を以って、自ら後進である余のために小著翻訳の労を執って下さった³¹」とあるが、それは、形式的な美辞麗句ではなかったものである。また、「林謙三先生年譜・業績目録」では、『隋唐燕楽調研究』は郭沫若の勧めによって書かれたものとしている。恐らく翻訳を前提とし勧めたのであろう。

そして、同じく「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」（三

○頁に、

郭さんは音楽に縁遠い方だし、殊に中国の古代音楽については門外漢でありましたので、この訳の精確を期すために、私の論文に関係のあるいろいろの文献を集めて研究を積まれました。だからこの小さな研究の訳にも思いがけない月日がかかっております。一通り訳ができて上つてからも、疑問が湧けばそれを問いただし、矛盾があれば指摘して已まなかったのも、訂正には更に数か月を要しました。私はその頃、奥さんから「うちの主人は一つことに凝りだすと他のことを顧みない性質です」と聞かされ、この訳のために自分の仕事も一時放棄しておられたことを知り大変すまないと思いましたし、またそんなにまでして頂くことを大変うれしく思いました。

とあり、郭沫若自身も翻訳のために文献を集めて研究するなど、自身の仕事を擲って翻訳に取り組んでいたという。また、郭沫若が林謙三とともに推敲に数か月を要したことは、先に引用した『隋唐燕楽調研究』の郭・林両氏の序にも見えるとおりである。このように郭沫若は『隋唐燕楽調研究』の翻訳に対し

て、真摯な姿勢で傾注して取り組んでいたことがわかる。また、随筆「郭沫若」に、

郭氏にとっては方面違いの難物であり、且つ一文にもならない、後進への奉仕のために、暫時自分の仕事までを放棄して関係古典を精読研究しつつ翻訳された——その頃の副産物に隋の楽人「万宝常」の一篇あり——いきさつを熟知しているだけに私の感謝の念は筆舌に尽せない。

とあるように、郭沫若は翻訳作業を通じて得た知見・資料を活用して、『隋唐燕楽調研究』とほぼ時を同じくして、隋代の音楽家、万宝常に関する論文を日本語と中国語で書き上げた³²。日本語版「万宝常——彼れの生涯と芸術」は、『日本評論』（東京：日本評論社）昭和十一年（一九三六）一月号に、中国語版「隋代大音楽家——万宝常」は、『文學』（上海：生活書店）第五卷第三期、一九三五年九月号に発表された³⁴。これらの論文には、林謙三の説が随所に紹介されている。

翻訳が完成した後、郭沫若は出版社探しにも尽力したようである。「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」（三〇頁）に、

訳は完成しましたが、郭さんの顔でも出版を引き受けるところはなかなか見当りません。でも漸くのこと、中法文化出版委員会の厚意により中国最大の書店である上海の商務印書館から出版されるときまった時の私の喜びは言葉では云い尽せません。この書は一九三六年十一月に初版が出ました。私はこの書によって日本の学界に第一歩を乗り出したわけであり、またこの書を仲介として中国その他の学者の知己を得ました。

とあり、出版社探しは難航したというが、その過程を示す資料が残されている。郭沫若から葉靈鳳（一九〇五—一九七五）に宛てた、一九三五年九月二十日付の手紙に次のように見える。

私はいま『隋唐燕楽調研究』（日本の林謙三著）約八万字を訳し終えたところです。学術的な研究であるため、原稿料を抑えて販売しても構いませんが（原稿用紙で計算して、一枚六百字、四元、これが最低限の金額です）、印刷紙にはこだわりたいと思います。張静廬がもし印刷を引き受けてくれるのであれば、先に三、四百元を送っていただければ、原稿をお渡しします。残金は、毎月一百元、支払

が済むまでです。どうか張静廬にお伝えください。もしその気がないのであれば、一言お返事ください。ほかの出版社を探すことにいたしますので。

郭沫若は、当初、現代書局からの出版を考えたようである。張静廬（一八九八—一九六八）は、当時、現代書局の経営者だった人物であり、郭沫若は、現代書局から、例えば、一九二九年には『中国古代社会研究』、一九三二年には『創造十年』を出版している。そして、当時、現代書局との連絡は葉靈鳳を通じて行われていたのである。

この交渉は失敗に終わり、続いて『燕京学報』での発表の可能性を考えたい。燕京大学の古文字学の教授で、『燕京学報』の主編である容庚（一八九四—一九八三）に宛てた、一九三五年十一月十五日付の手紙に次のようにある。

ここに申し上げますに、私には日本の友人林謙三氏がおります。彼は日本の帝展の彫刻家で、中国古代音楽を一心に研究し十余年になります。英・仏・インドの諸国の文章に通じ、著作に『隋唐燕楽調研究』の一文がありますが、中国外国のこれまでの研究成果一つ一つに検討を加え、新し

い説を打ち立て、極めて価値のあるものです。彼は『燕京学報』での発表を願っておりまして、私がすでに中国語に訳してあり、約五、六万字です。『学報』に掲載することはできません。原稿料は旧例のとおりで構いません。林氏は、中国語での発表を考えております。発表する際には、是非とも私の訳者名は用いずに、林氏の著者名だけをを用いてもらえればそれで結構です。国外の学者の寄稿に先例を開くことにもなり、喜ばしいことはありませんか。お返事をお待ちしております。³⁷⁾

郭沫若は、上述の『甲骨文字研究』の初稿を書き上げたとき、それまで面識のなかった容庚に手紙を書いて教えを乞うたことがあり、それ以来幾度となく文通している。この手紙もそのうちの一通である。また、郭沫若は一九三一年には『燕京学報』第九期に二篇の論文「『臣辰盂銘考釈』と「湯盤孔鼎之揚権」を、郭鼎堂（鼎堂）は字）の名で発表しており、そのような経験も関係していたのであろう。あるいは、論文としてではなく、著書としての出版も視野に入れていたのかも知れない。一九三三年から、ハーバード・燕京研究所では、一定の分量を備えた論考を「燕京学報専号」と題する叢書として刊行し始めて

おり、唐代の音楽文化に関連するもので言えば、例えば、向達『唐代長安与西域文明』も、一九三三年にこの叢書の第二冊として出版されている。

結局、『燕京学報』での掲載も認められず、その後、中法文化出版委員会に連絡をとり、商務印書館からの出版が決まったものと考えられる。『隋唐燕楽調研究』は、この中法文化出版委員会の編輯として出版されたものである。

この当時、中法文化出版委員会の主任を務めていたのは、沈尹默（一八八三—一九七一）である。郭沫若は、日本留学中の一九二一年、北京大学教授として在外研修のため京都に滞在していた沈尹默に初めて出合い、また、一九三六年頃から日本脱出までの間、彼から経済的援助を受け、脱出後、まず向かったのが上海の沈尹默のところであった。³⁸⁾³⁹⁾

また、沈尹默は、当時、孔徳図書館館長も兼任しており、郭沫若は、一九三九年に、『石鼓文研究』を、中法文化出版委員会の編輯、孔徳研究所叢刊の一つとして、長沙の商務印書館から出版することになるが、その経緯が、『隋唐燕楽調研究』出版の背景を示唆しているように思われる。

郭沫若は、先に見たように、一九三六年（昭和十一年）の夏、林謙三に石鼓文の拓本の撮影を依頼したが、郭沫若は、す

ぐにそれらの写真に基づいて旧版『石鼓文研究』（文求堂書店、一九三三年）を修訂し、その夏のうちに、その原稿を上海の沈尹黙に送っている。このとき、金祖同が郭沫若に、原稿を送付した理由を尋ねると、郭沫若は次のように答えたという。

「その理由はだね、孔徳研究所から毎月百円送ってくるのに、ぼくは長いこと原稿を送っていない。自分として、どうもあいすまない。それにまた、自費出版もいいとは決まっていなと思うので、それで……」^①

郭沫若は沈尹黙からの経済的支援に対して、原稿という形で応えていたのである。『石鼓文研究』の原稿を送る数か月前、一九三六年五月には、郭沫若の『先秦天道觀之進展』が、上海の商務印書館から中法文化出版委員会編輯として、郭鼎堂の名で出版されている。そして、その約半年後には、同じく中法文化出版委員会の編輯として『隋唐燕楽調研究』が出版されたのである。

そのほか、興味深いことに、一九三六年に出版された『隋唐燕楽調研究』の初版本には、容庚への手紙において郭沫若が提案したとおり、訳者名が表紙にも奥付にも記されておらず、

郭・林両氏の序において、郭沫若が訳者であることに言及するのみである。^②一九五五年の再版の折に、はじめて表紙・奥付に「郭沫若訳」と明示されるようになったのである。

（四）二つの郭沫若像

林謙三は、出版を目前に控えた、昭和十一年（一九三六、郭氏四十三歳、林氏三十七歳）の夏、郭氏に謝意と敬意を表すため、彫像二体を制作した。制作にあたっては、郭沫若を幾度もアトリエに招いてモデルになってもらったという。^③

冒頭に掲載した写真はそれら二体との記念撮影である。この写真は長屋糺氏所蔵であるが、それと同じものが、中国の雑誌『宇宙風』（一九三六年、第二十八期）の巻頭に「郭沫若先生近影」として掲載され、その裏面に郭沫若の次の言葉が記されている。

写真には孤独のものはいない。この写真は、日本の友人林謙三氏が私のために制作した胸像で、彼のアトリエで撮影したものである。右側は林氏、私とは言えば、「影に対して三人を成」している。林氏は彫刻のほか音楽を得意とし、とりわけ我が国の音楽史に造詣が深く、『隋唐燕楽調

研究』の著作があり、原稿はすでに私が中国語に翻訳してあり、近日中に出版される。一九三六年十月十三日郭沫若⁴⁵

写真の内容を説明すると同時に、『宇宙風』の読者に、近刊書である『隋唐燕楽調研究』を知らしめるものとなっている。この「影に対して三人を成す」とは、李白の有名な「月下独酌」の一節であるが、ここではそれを踏まえて、郭沫若と彫像二体、あわせて三人となったことを言っているのである。

写真中央の腕組みをした姿の彫像は、昭和十一（一九三六）十一月に「鼎堂先生」として文展招待展に出展されたが、その後、空爆で焼失してしまったという⁴⁷。

写真の最も左側にある一体は、中国語訳に対する感謝のしるしとして、鑄造して郭沫若に贈呈されたものである。その後、この彫像は、昭和三十年（一九五五）に、郭沫若の次男、郭博氏（一九二〇—二〇一〇）を通じて、中日文化研究所に寄贈された⁴⁸。郭一家は次々と中国へ渡っていったが、最後になった博氏の帰国を機に、郭沫若在日中の蔵書とともに、寄贈されることになったのである。昭和三十三年（一九五八）に、財団法人アジア文化図書館、沫若文庫（現公益財団法人アジア・アフリ

カ文化財団、アジア・アフリカ図書館、郭沫若文庫。三鷹市）が設立されると、蔵書とともにこの胸像もそこに移管され、現在もアジア・アフリカ図書館に展示されている。

そして、この彫像には、郭沫若の揮毫による四言四句の銘が刻まれている。

巧は天工に薄^{せま}り、我を化して銅と為す。影は未だ嘗て動かず、時空を隕絶す。林謙三兄、余の為に此の肖像を作る。時に四十五歳。沫若。（巧薄天工、化我为銅、影未嘗動、隕絶時空。林謙三兄爲余作此肖像、時年四十五歳。沫若⁴⁹）

「巧は天工に薄る」は、所謂「巧は天工を奪ふ（巧奪天工）」⁵⁰に擬えた表現であり、「影は未だ嘗て動かず」は、『莊子』「天下篇」の「飛鳥の景^{かげ}は、未だ嘗て動かざるなり（飛鳥之景未嘗動也）」を踏まえたものである⁵¹。天の仕業かと見まこうばかりで、自身の姿が彫像として時空を超えて永遠に残るであろう、と林謙三の技巧を讃えたものである。前述のように郭沫若が「影に対して三人を成す」と戯れたのは、この銘において彫像を「影」と表現したことともかわりがあるであろう。

(五) 突然の別れ、そして、その後

これまで見てきたように、二人は、約十年の歲月の中で親交を深めてきたが、昭和十二年（一九三七）七月七日、盧溝橋事件が勃発し、突然の別れが訪れた。随筆「郭沫若」に次のようにある。

こうした交遊十年、その人となりの誠実さと人情味の豊かさによいよひきつけられて行った矢先、郭氏は忽然眼界から去った。昭和十二年七月七日の華北事変は郭氏の亡命生活を急速に打ち切らせた。その月二十五日の朝、私は虫が知らせるわけでもなく郭氏を訪ねた。が郭氏はその日の明方に家を出奔したのである。僅か数時間の行き違い！思い当るのは数日前訪ねた時、顔見知りの中国青年達のこと、折りが折りとて夫人は私が事件を予知しての来訪と一時は疑ったのも無理はない。私は何も知らなかったのだが。

郭沫若が出奔した直後、林謙三は郭氏宅を訪れたというのである。偶然の出会いから十年、『隋唐燕楽調研究』を出版して間

もなくの、数時間の行き違いによる別れ、林謙三は、「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』（三二頁）で「始めから終わりまで全く不思議な縁でありました」と感慨をもつて振り返る。ここに見える「顔見知りの中国青年達」とは、石鼓文の撮影で同席し、郭沫若と一緒に脱出した、殷塵をはじめ、『郭沫若帰国秘記』に登場する面々を指すのであろう。

私は今後幾年かの苦難の道を辿るべき夫人らの身の上に思いをやり、せめてもの慰めになろうかと、手許にあった郭氏のいろいろの写真を一冊のアルバムに収めて贈ったり、また郭氏の日本脱出記を載せた中国雑誌が見つかるや早速これを届けたりした。

事実、残された家族には、戦中、敵国要人の妻子として受難の日々が待ち受けていたのであった。⁽³²⁾

「日本脱出記」とは、『宇宙風』（一九三七年八月、第四十七期。未見）に掲載された「由日本回来了」⁽³³⁾であろう。そこには、郭沫若が家族を日本に置き去りにせざるを得なかった苦悶が描かれている。本篇はすぐに山上正義（一八九六—一九三八）によって「日本を去る」とのタイトルで日本語に翻訳さ

れ、『改造』上海戦勝記念臨時増刊号（一九三七年十一月、第十九卷第十三号、二九六—三〇四頁）に掲載された。⁵⁴佐藤とみは、まもなく、この日本語訳を目にすることになったに違いない。

家族との交渉はなお続いたが、戦争は私のもつ郭氏の思いの品々を一拳に奪い去った。書翰、墨蹟、訳稿、写真、手沢本等々。焼あとの灰をかきわけて発見したのは五寸角の方硯一枚のみ。この硯こそ郭氏の毛筆による原稿や書類のための墨が磨られたもので、夫人から形身として頂戴したものである。

「林謙三先生年譜・業績目録」によると、昭和二十年（一九四五）四月十三日（林氏四十五歳）に空襲に遭い、十四日未明には家とともに楽器や図書などほとんどが焼失したという。⁵⁵このとき郭沫若との思いの品々も、硯を除いては灰燼に帰してしまっただけである。ここに見える「訳稿」とは郭沫若による『隋唐燕楽調研究』の中国語訳の原稿であり、恐らく日本語の原稿もこのときに焼失してしまっただけであろう。『隋唐燕楽調研究』は、筆者林謙三が日本人であるにもかかわらず、日本語

版は刊行されていないが、戦災によって日本語原稿が失われたことが、主たる原因であつたと思われる。⁵⁶

終戦後、帝都を離れた私が逢えたのは京都に遊学中の長女淑君だけである。郭一家は次々中国に渡り、郭氏の遺した文献千五百点は一括して沫若文庫を建てて保管されとの話だが、あの思ひ出深い市川の家はどうなるのであろうか。

林謙三は戦後、奈良に移り住む。関西で出会えた長女淑君とは、前述の淑子、郭淑瑀氏である。昭和二十年（一九四五）九月に東京女子大学数学科を卒業後、昭和二十一年（一九四六）から昭和二十三年（一九四八）に中国へ渡るまで、京都大学工学部で建築を学んでいたという。⁵⁷なお、淑瑀氏のご息女は、国士館大学教授の藤田梨那氏で、現在、国際郭沫若学会会長・日本郭沫若研究会の副会長を務めておられる。沫若文庫は、前述のとおり、現在、アジア・アフリカ図書館、郭沫若文庫として公開されている。千葉県市川市須和田六所神社付近にあった郭沫若の旧宅は、平成十六年（二〇〇四）九月に真間五丁目公園に移築・復元され、現在、市川市郭沫若記念館として一般に公

開されている。⁽⁵⁸⁾

私は今年になって郭氏の夢を二度も見ている。兄事した頃の昔ながらの温雅な郭氏にならもう一度逢いたいものだと今も切に思っているのだが。

郭沫若の帰国以来、この随筆が書かれた昭和三十年（一九五五）当時まで、林謙三は再会を願いながらも、その機会には恵まれなかった。

「昔ながらの温雅な郭氏になら」とあるのは、世事に疎いとされる林謙三も、激動の中国で生きる郭沫若について、ジャーナリズム等を通じて様々見聞きしていたからであろうか。同じく昭和三十年に書かれたと思われる「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」（三一頁）に、

それ以後やがて十八年になろうとしています。私は郭さんから受けた大きな恩を終世忘れられる筈はありません。いつもなつかしい思いを胸にたたんで、長年月にわたる中国音楽に関する私の研究が立派にまとまったら、それを郭さんにささげたいと、ひそかに思って今日まで静かに過し

て来たわけであります。

とあり、郭沫若のことを思いつつ、中国音楽の研究に取り組んできたことが窺える。この十八年の間、戦中戦後と苦労を重ねながら、研究範囲を中国のみならず、日本の古楽譜や正倉院楽器にまで広げ、昭和二十五年（一九五〇）に朝日文化賞を受賞し、昭和二十六年（一九五一、五十二歳）には、奈良学芸大学に就職している。

そして、この随筆「郭沫若」や「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」が世に出してから約八か月後の昭和三十年（一九五五）十二月十三日（郭氏六十三歳、林氏五十六歳）、ついに中国科学院訪日学術視察団の団長として来日中の郭沫若と再会を果たす。郭沫若は、建国以来、中国科学院院長の座に就いていた。昭和四十九年（一九七四、林氏七十四歳）に書かれた「随想」⁽⁶¹⁾に、その時のことが触れられている。

戦後、昭和三十年、郭さんを団長とする訪日学術視察団が見えた時、私は天理の真柱邸と奈良の東大寺本坊で十八年振りに、この人に逢っている。

この時、妻長屋サトと同伴で再会したと聞く。⁽⁶²⁾しかし、林謙三はその当時の郭沫若について多くは語らない。

一方、再会後、郭沫若が林謙三に言及したもの、ほとんど見出せない。前述のとおり、一九四二年に史劇「筑」が書かれるが、再会後の一九五六年に「高漸離」と改題し大幅に改訂され、そのときに、解説中に見られた林謙三の名も削除される。唯一、音楽学者丘瓊蓀（一八九五—一九六五。『燕楽探微』の著者）に宛てた、一九六三年十月二十八日付の郭沫若の返信に『隋唐燕楽調研究』についての言及が見られるが、その内容は「林書については手元になく、（燕楽調については）ほとんどすべて忘れてしまいました」というものである。また、再会後、二人が直接やりとりをしていたかについても定かではない。

郭沫若にとって、林謙三は過去の人となってしまったのであるろうか。激流のごとき中国の現代史と、郭沫若の生き様を思いおこせば、様々な憶測もできようが、それについてはしばらく問わない。

時は流れ、日中国交回復の翌年にあたる昭和四十八年（一九七三、七十三歳）、林謙三は、中国科学院の外事局を通じて、郭沫若と連絡を取る。日本語による増補改訂版『東アジア楽器考』（東京…カワイ楽譜）の出版にあたって、『敦煌壁画集』⁽⁶³⁾か

ら図版を転載するためである。⁽⁶⁵⁾

今、『東アジア楽器考』の表紙をめくると、色鮮やかな敦煌壁画のカラー図版がまず目に入る。その壁画の図版三点目の上部に添え書きがある。

「敦煌壁画集」の三葉は、中国科学院院長・郭沫若先生の御厚意により掲載を許可されたものである。

林謙三が『東アジア楽器考』の自序で「東アジアを中心とする古今いろいろの楽器に興味をおぼえ、その起源、沿革、図像、音律等々を調べてみたくなり、東洋文庫通いをはじめたのが昭和のはじめ頃である」というように、楽器への興味が彼の音楽研究の原点であり、晩年、これまでの楽器に関する研究を集大成するにあたり、その象徴として、古代東西交渉の要衝であった敦煌の、しかも本書に登場する様々な楽器が一同に会して描かれる壁画によって、その巻頭を飾ることとし、そのために郭沫若に連絡をとることにしたのである。その根底には、前述の「中国音楽に関する私の研究が立派にまとまったら、それを郭さんにさげたい」という思いがあったのではなからうか。⁽⁶⁶⁾「林謙三先生年譜・業績目録」によれば、林謙三には未刊行の

著書や未発表の訳譜が複数あり、晩年も研究意欲は尽きなかったようであるが、結果として、これが最後の著書となつてしまった。

林謙三にとっては、最晩年まで、若き日の「郭さん」は特別な存在であつたようである。昭和五十年（一九七五、林氏七十六歳）、奈良県立美術館において、「近代奈良の彫刻」展が開催され、そのとき、郭沫若像も陳列された。当時、アジア・アフリカ文化財団の所蔵になつて以来、はじめての一般公開であつたという。奈良学芸大学の同僚であつた牧野英三氏（一九二〇—二〇〇三）は、展覧会を見学したその足で、林謙三の自宅へその感動を伝えに行つたと言ひ、そのときの林謙三の様子を次のように書き残している。

さて展覧会の初日、この像を見たが感動の余りその足で先生宅に伺つた。先生はまだご覧になつておられなく、数十年振りの像とのご対面、懐かしさも加つてかもどかしげなご様子でしたが、今度の像は二つ作つた中の一つで（内一つは空襲で焼失）その行方すら定かでなかつたこと、アトリエの中で出来たばかりの二つの像を前にする往年の若きお2人の珍しいお写真まで見せて戴き、終始敬愛の情を

込めて氏を「郭さん」と呼ばれた先生の尽きることの知らないお話は未だに強烈な印象となつて脳裡に蘇つてくる。

この後、林謙三は美術館へ足を運んだに違いない。そして、郭沫若の胸像と再会した翌年、林謙三は七十七歳で、その生涯を閉じたのである。

改めたい個所も少なからずありますが、私の第一番目の野心作であり、郭さんの助力が織り込まれていることによつて、私にとつてはまことに記念すべきなつかしい著述であります。郭さんにしてはこんな訳など一生の仕事のうちに入らないかも知りませんが――⁽⁶⁷⁾

四、むすび

冒頭に述べたとおり、林謙三は『隋唐燕楽調研究』によつて、本格的に音楽学の研究に踏み出した。現在、我々が知る林謙三の業績の数々は、この著書の出版なしにはあり得なかつたといつても過言ではあるまい。そして、この著作は、林謙三と郭沫若との十年間の交流によつて生み出された。それも、偶然

の出会いと突然の別れという、「不思議な縁」によってである。いささか情緒的な物言いになるが、林謙三にとって、それは一種の運命だったのではなからうか。郭沫若の亡命期における二人の關係は、政治を超越した、学術的で、そして、ときには家族ぐるみの、いわば純粹なものであったことは、これまで見たとおりである。それは、かえって、林謙三が、郭沫若にとつて、経済的援助も、社会的な便宜も齎すことのない、一介の学究の徒に過ぎなかったからであつたからかも知れない。このようなかで生み出された『隋唐燕楽調研究』と郭沫若像は、そのような二人の、学問と芸術によつて結ばれた友情の結晶であつたといふのは言い過ぎであらうか。

筆者は、近年、『隋唐燕楽調研究』の日本語訳の作成⁽⁶⁸⁾として、林謙三旧蔵書の調査・整理に携わつており、その過程で知り得たいくつかの資料を端緒として、二人の關係を辿つてみることにした。それは、東洋音楽学においては、名著『隋唐燕楽調研究』誕生の経緯を解き明かすことになるからであり、中国文学に対しては、郭沫若の日本亡命期における一側面を知る一助となると考えたからである。

筆者は、近現代史、中国近現代文学、そして郭沫若研究については全くの門外漢であり、認識に誤りも多々あると思われる

る。ここに諸賢の批正を乞ふ次第である。

〔付記〕

本稿は 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的探究」(研究代表者…長谷部剛〔関西大学〕、研究期間…二〇一五—二〇一七年度)による研究成果の一部である。

〔謝辞〕

写真の掲載・資料の閲覧などを快く許可してくださつた長屋糺様、資料調査に協力してくださつた奈良県立図書館複写担当佐藤明俊様、並びに公益財団法人アジア・アフリカ文化財団、アジア・アフリカ図書館佐藤万矢子様に心より感謝申し上げます。

注

(一) 写真は長屋糺氏(林謙三の子息)蔵。写真が保存されていた封筒に「一九三六昭十一年夏写 滝野川のアトリエにて郭沫若と共に」とある。林謙三は、東京市滝野川区西ヶ原(現在の東京都北区西ヶ原)に居を構えていた。後出の「西ヶ原」も同じ場所を指す。写真の詳細に

については、後述する。

- (2) 燕楽とは、燕(宴)饗音楽の意味で、俗楽の一種であり、燕楽調はその楽調のことである。本書は、燕楽調の起源・名称・性質について、古今東西の文献や楽曲・楽器等の分析を通じて、実証的に解明したものである。その楽調は、インドに起源し、中国六朝時代の末期頃から亀茲を通じて伝来、隋を経て唐代に完成、その後、後世の俗楽に伝わる。また、日本の雅楽にも伝来し、そのうちのいくつかは今日まで伝存している。

- (3) 主に、平野健次・久保田敏子編「林謙三先生年譜・業績目録」(東洋音楽学会『東洋音楽研究』第二四・二五号、一九六八年、三六―四五頁)、同編「林謙三先生年譜・業績目録補遺」(同『東洋音楽研究』第四一・四二号、一九七七年、一三九―一四〇頁)を参照した。

- (4) 大蔵雄夫「彫刻人層を行く(八)」(『サウンド』二巻四号、一九三三年九月、八―九頁。五十殿利治監修、齊藤祐子編『美術批評家著作選集 第十三巻 近代日本彫刻と批評』四五八―四五九頁(二〇二二年、ゆまに書房)所収)による。

- (5) 東洋音楽の研究を始めた動機について、『東アジア楽器考』(東京・カワイ楽譜、一九七三年)の自序で「漢文学に魅せられた中学時代、詩文に描かれた匈奴の奏する胡笳の哀切な響きを忘れなかった。胡笳とはどんな楽器であったのだろうか。その正体が知りたかった。こんなことも一面動機となり、東アジアを中心とする古今いろいろの楽器に興味をおぼえ、その起源、沿革、図像、音律等を調べてみたくなり、東洋文庫通いをはじめたのが昭和のはじめ頃である。」と述べている。

- (6) 授賞理由が『朝日新聞』(大阪版)一九五〇年一月八日、朝刊、第二面に掲載されている(東京版にも見えるが、大阪版の方が紙面を割き、やや詳しい)。

- (7) 「文藝春秋」一九五五年四月号、四二―四三頁。

- (8) 郭沫若自伝「跨着東海」第二章「海濤」(上海・新文芸出版社、一九五一年)七六―七七頁による。

- (9) ただし、郭沫若自伝「我是中国人」第三章「海濤」一一七―一二六頁)によると、郭沫若が東洋文庫に通い始めたのは、この年の八月から九月にかけてであり、時期が一致しない。

- (10) 「我是中国人」第三・四章「海濤」所収)には、郭沫若が東洋文庫に通い始めた経緯や、甲骨金石文を研究する様子が描かれている。

- (11) 郭沫若は、一九〇八年秋、十六歳の時に、腸チフスにかかり、中耳炎を併発し、聴覚を損傷した。郭沫若自伝「我的童年」第三篇、第五章「郭沫若全集 文学編 十一巻」(北京・人民文学出版社、一九九二年)一三五頁)による。

- (12) TubaもTubaもラテン語である。「吹鞭」について、林謙三は『東アジア楽器考』「胡笳について」の中で「吹く鞭とは漢語らしくない。……吹鞭の語原としてかつてラテン語の *tuba* ローマ人愛好の笛——を連想したことがあるが、なんらかの西域語の訛音を写したものと考えてよいと思う。」(五四二頁)と述べる。一方「屠鑿角」については、『東アジア楽器考』「竽簫の語原について」の一節「説文」の屠鑿と簫(竽)簫について「(五四九―五五六頁)の中で「屠鑿」の原語について考察しているが、そのような説は見えない。語源をラテン語に求めるこれらの説は、後に修正したであろう。」

- (13) 「中國與希臘之發生關係、由別項文獻之證明、如樂器之「吹鞭」爲「Tuba」之對譯、「屠鑿角」爲「Tuba」之對譯。日友林謙三説。」郭沫若「甲骨文字研究」(上海・大東書局、一九三一年)下冊「釈支干」六十八丁裏。日本語訳は筆者による。

- (14) 「同在庫中研究之林謙三君、於無心之中得成益友。林君乃日本青年雕刻家、其研究之題目爲漢時代中西藝術之交涉、而主眼尤在音樂。茶餘

飯後毎就所得者相與談論，恆樂而忘疲也。余深有感於林君之奮發，無形之中受其鼓勵者不少。今當擱筆，余甚望其研究之早觀厥成。」蔡震『郭沫若生平文獻史料考辨』（北京：社会科学文献出版社，二〇一四年）二七三頁に引く。日本語訳は筆者による。

(15) 他的爲人與求學的態度是我所感佩的。他爲人很謙和，而爲學極專摯。『隋唐燕樂調研究』（上海：商務印書館，一九三六年）「序」。

(16) 林謙三述，NHK国際放送原稿「郭沫若さんと私の『隋唐燕樂調研究』」。原稿は長屋礼氏所蔵。日本郭沫若研究会「郭沫若研究会報」第十四号（総No15，二〇一五年，二九—三二頁）所載の翻刻より転載。原稿の別紙に「昭和三十一年四月十四日録音。同十一日NHK国際放送，十九日中国語放送」と日付が記されるが，内容から判断して，「昭和三十年」の誤りと考えられる。なお，「郭沫若研究会報」所載の翻刻は，長谷部剛氏（関西大学）による解説を附している。併せて参照されたい。

(17) 「林氏於此書之外尚有西域音樂東漸史之大作，屬稿已就，尙待整理。」『隋唐燕樂調研究』「序」。

(18) 日本語版『東アジア楽器考』及び中国語版『東亜楽器考』には，雑誌での発表を経ないで収録された論考が多数あるが，そのうち，例えば「撥奏絃楽器の東漸」（日本語版三七七—四〇四頁）・「胡笛について」（同五三四—五四七頁）・「箏の語源について」（同五四八—五七一頁）等，楽器の起源を西方に求める論説は，あるいはこの頃から考察され始め，『西域音樂東漸史』の一部を構成していたのかも知れない。また，大蔵雄夫「彫刻人層を行く」（八）（一九三三年）には「あらゆる東洋古楽器の文献を探り，中央亜細亜から西域，印度に及んで研究し，今やそのカドは一万以上を算するに至った。そして一兩年後には「音樂考古学」を著わすと云う」とあり，この当時「西域音樂東漸史」の他に「音樂考古学」の構想もあったことを示しているが，こ

れもまた発表されることはなかった。恐らく，この時期のこれらの構想がもとになり，戦中に富山房から『東亜楽器考』の出版が計画され（昭和二十年（一九四五）中絶，そして，中国語版『東亜楽器考』，日本語版『東アジア楽器考』の出版へと発展していったのであろう。

(19) 「這其間，我曾和鼎堂到一個美術家林謙三君那裏去，託他把那石鼓文照了相，又用拍電影用的卡片重印下來，再去放大。林君有一位朋友在化學研究所裏工作，因此我們的所費也不多。」（郭沫若婦国秘記）（上海：言行社，一九四五年）四九頁。初版は『鼎堂婦国実録』（上海：說文社，一九四一年十月，未見）。日本語訳には，さねとうけいしゅう訳「郭沫若日本脱出記」（東京：第一書房，一九七九年）を用いた。以下，同じ。

(20) 「初稿譯成後，原作者與譯者更經過了八九個月的長期的推敲，增改。」『隋唐燕樂調研究』「序」。

(21) 「於初稿譯成後涉歷數月，刪正增修之處不遑枚舉。」『隋唐燕樂調研究』「原作者序」。

(22) 「隋唐燕樂調研究」刊行以前に，林謙三が著した音楽関係の業績には以下のものがある。「江戸時代の笛壳とその楽器」（『武蔵野』二十二卷五号，昭和十年（一九三五）五月）、「匏琴考」（『支那学』八卷三号，昭和十一年（一九三六）六月）、「享保年代の新楽器「箏」について」（『武蔵野』二十三卷十一号，昭和十一年（一九三六）十一月）。

(23) 「我從前在日本的時候，在一位日本朋友林謙三君的家裏看見過一種古樂器，是用半邊相當大的竹子做成的，長不滿三尺，脊上安絃，絃是已經朽了的，只剩下安絃裝置。竹身似曾以油類之物塗飾，但仍保存古竹色，雖遭蠹蛀，並不甚烈。一端近底之邊緣處有半月形的二孔，左右各一，分明可供手或指把握。我現在回想起來，這種樂器，應該就是古時候的筑」。「筑」（初版は上海：群益出版社，一九四六年。未見。上海：新文芸出版社，一九五一年版を用いた）附録「關於「筑」」一四二頁。

日本語訳には、須田禎一訳『則天武后笈』（東京：平凡社、東洋文庫、一九六三年）二八七頁を用いた（この記事については、関西大学教授、長谷部剛氏にご示教いただいた）。ただし、一九五七年の改訂版「高漸離」では、「林謙三君」が削除されている（『郭沫若全集 文学編 第七卷』（北京：人民文学出版社、一九八六年）一一六頁による）。

(24) 郭沫若が佐藤をとみとの間にもうけた子供には、ほかに長男の和夫（一九一七—一九九四）、次男の博（一九二〇—二〇一〇）、三男の仏（一九三二—二〇〇四）、長女の淑子（一九二五—一九八四）がいる。なお、郭沫若は帰国後、一九三九年に于立群（一九一六—一九七九）と結婚し、四男二女をもうけている。

(25) 昭和九年一月に、長女幸代が生まれたが、三月に夭折。

(26) その記事を引用すると、「……またおびただしい草稿が多数発見された。例えば日本語の訓読と中国古音の比較を説いた「刺身論」などで、これには「サシミ」は中国の「三滲」でこれはシウウ、ス、シウウガ汁などを魚の生身に滲（にじ）ませて食べる所からきたもので「三滲」は「サムシヤム」と発音するのだが、このうち日本人は「ム」の鼻音が発音できぬため「サシミ」になったと説き「甘」が中国語の「カム」から「アマ」「暗」が「アム」から「ヤミ」になったものもこの関係だと記している。」とある。なお、東京版では「郭沫若氏から貴重な文献——中日文化研究所へ千五百余点」と題し、同趣旨の記事が見える。

(27) 史劇『屈原』は一九四二年に重慶文林出版社から出版され、また、史論としては、『屈原』（上海：開明書店、一九三五年）、『屈原研究』（重慶：群益出版社、一九四三年）等がある。そのほか、訳書に『屈原賦 今訳』（北京：人民文学出版社、一九五三年）がある。林謙三がここで屈原に言及した背景としては、この随筆が書かれる三年前の昭和二十七年（一九五二）、須田禎一氏（一九〇八—一九七三）により、史

劇『屈原』の日本語訳（てすびす叢書9、未来社）が出版され、また、同年、戯曲『屈原』が、日本の前進座により初演されたこと、そして、二年前の一九五三年は屈原没後二千二百三十周年にあたり、それに合わせて中国において屈原に関する論文が陸統と発表される中、郭沫若も数編を発表、そのうち『人民文学』一九五三年六月号に掲載の「屈原簡述」が日本語に翻訳され『人民中国』（日本語版）創刊号（一九五三年六月）に掲載された（一九五三年七月には『歴史評論』（七巻七号）に転載）こと等があり、日本でも郭沫若の屈原に関する著作・記事等に接する機会があったからであろう。

(28) 林謙三が伎楽面を描いた色紙（長屋礼氏蔵）に「不鳴菴」の落款印が見える。

(29) 郭沫若は国防文学に関して、「在国防的旗幟下」（『文学叢報』一九三六年七月、第四期）、「国防・汚池・煉獄」（『文学界』一九三六年七月、第一巻第二号）、「蒐苗的検閲」（『文学界』一九三六年九月、第一巻第四期）、「我对于国防文学的意见」（『东方文芸』一九三六年十月、第一巻第四期）等を著しているが、それらは、一九三六年、つまり『隋唐燕楽調研究』出版の年に発表されたものである。ただし、「当時中国」云々とあるのは、新聞編集者による注釈か。胡適との論争は、国防文学とは別である。

(30) 牧野英三「林先生のことども」（『東洋音楽研究』第四十三号、一九七八年）一五五頁。

(31) 「沫若先生乃余多年所兄事之畏友、以數年來之友誼自行爲後進之余執此小著移譯之勞。『隋唐燕楽調研究』原作者序」。

(32) 郭沫若が「万宝常」を執筆した動機については、藤田梨那「郭沫若的万宝常研究之動機与意義」（『郭沫若学刊』二〇〇九年第三期、一七—二〇頁）に詳しい。

(33) 脱稿の時期は、本論の末尾に「一九三五年七月十三日夜脱稿」と見え

る。本論文は、後に、『沫若近著』（上海：北新書局、一九三七年。未見）に転載され、また『歴史人物』（上海：海燕出版社、一九四七年）三〇—六五頁に収録される。なお、『歴史人物』の日本語訳に、牧田英二訳『歴史人物』（郭沫若選集刊行委員会編『郭沫若選集15』京都：雄渾社、一九八三年）があり、『隋代大音楽家—万宝常—の日本語訳も収められている（六一—一六頁）。

〔34〕「万宝常—彼れの生涯と芸術—と」隋代大音楽家—万宝常—を比較すると、日本語版より中国語版のほうが長篇であり、且つ詳細である。また、発表の時期は、中国語版の方が早くに世に問われているが、内容を見ると、日本語版に見える明らかな錯誤が中国語版では修正されており、恐らく日本語版を先に執筆し、中国語版は、それをもとに推敲、増補改訂したものと考えられる。

〔35〕「我現在譯成了一部隋唐燕樂調研究（日本林謙三著）有八萬字的光景、因爲是學術研究的東西、我可以把稿費放低出售（依原稿紙計算、每張六十字、價四元、此乃最低價。）」但印刷紙張要講究。靜慮如肯承印、請他先寄三四百元來、我可將稿交出。餘款每月一百、交清爲止。請您向他提說一下、如不願意請覆一字、我好找別家。」孔另境「現代作家書簡」（上海：生活書店、一九三六年）二二二頁。日本語訳は筆者による。

〔36〕施蛰存「現代」雜憶（二）（『新文学史料』一九八一年第二期）一六三頁による。

〔37〕「茲有啓者、余有日本友人林謙三君、乃日本帝展之雕刻家、專心研究中國古代音樂十餘年、通英、法、印度諸國文字、著有《隋唐燕樂調研究》一文、於中國外國歷來研究之成績均一加以檢點、而別創一新說、極有價值。渠欲在《燕京學報》上發表、已由弟爲之譯成中文、約五、六萬字。《學報》能登載否？發表費如舊例不成問題也。林君之意在專以漢文發表。發表時、可不用弟譯名義、直用林君著作之名可矣。

國外學者寄稿、亦可開一創例、足下樂爲之耶？望復。」曾憲通編注『郭沫若書簡—致容庚』（廣州：廣東人民出版社、一九八一年）一八八頁。日本語訳は筆者による。

〔38〕その経緯は「我是中国人」第四章（『海濤』二二九—二三〇頁）に描かれる。また、容庚に宛てた数々の手紙は、『郭沫若書簡—致容庚—』に収録されている。

〔39〕「創造十年」（上海：現代書局、一九三二年）第七章、一四三頁による。殷塵「郭沫若婦国秘記」前編第十三章、三七頁、後編第六章、一六七—一六八頁による。

〔41〕「我的理由是、孔德研究所每月送我一百元、我已好久沒有寄給他們稿子了。自知很有些不好意思。並且我覺得、自印也未必見得有怎樣好處、所以……」。『郭沫若婦国秘記』前編第十六章、五〇頁。

〔42〕「隋唐燕樂調研究」郭沫若「序」に「他這次撰述了這部隋唐燕樂調研究、願意先用漢文來發表、我便從原稿的形式中替他逐譯了過來」、「原作者序」に「沫若先生乃余多年所兄事之畏友、以數年來之友誼自行爲後進之余執此小著移譯之勞」。

〔43〕菊地三郎「郭沫若先生・亡命十年の点描——沫若文庫」が語るそのころのこと（『朝日アジアレビュー』一九七一年第一号）一六六頁に引用された林謙三の手紙に「製作中は何度モ西ヶ原のアトリエに見え、モデルになって頂きました」と見える。

〔44〕写真には、「昭和三十八年 陶易王氏より入手」との裏書がある。陶易王氏は、佐藤をとみの妹、佐藤みさをと中国の作家陶晶孫（一八九七—一九五二）夫妻の三男。また、写真が保存されていた封筒にはペン書きで「小説月刊『宇宙風』巻頭写真より」と書かれていたが、その下に鉛筆による「小説月刊『宇宙風』巻頭写真より複写か」との下書が見える。長屋氏所蔵の写真は『宇宙風』掲載のものよりもきめが細かいように見え、『宇宙風』からの複写か否か疑わしい。あるいは、次

注に見え、上海図書館所蔵のものを複写したものが。

- (45) 「像片無單身者、此張乃日友林謙三君 (Hayashi Kenzo) 爲余製作胸像、在其製作室中所攝、右側即林君、余則「對影成三人」矣。林君於雕刻外復擅場音樂、於我國音樂史之造詣尤深、有「隋唐燕樂調研究」之作、已由余從原稿中逐譯成中文、不日即可出版之。一九三六年十月十三日 郭沫若。原文は『宇宙風』に基づくが、翻訳は肖斌如「在日本陳列的郭沫若青銅胸像的來歷」(『上海師範大學學報』(哲学社会科学版)一九八二年第四期)四〇頁を参照しつつ適宜改め、句読・日本語訳は筆者による。この写真の現物は、肖斌如によると、現在、上海図書館に所蔵され、郭沫若の言葉はその写真の裏面に記されていると言う。

- (46) 「林謙三先生年譜 業績目録」による。

- (47) 『牧野英三』(林先生のことども)一五六頁による。

- (48) 『産業経済新聞』(奈良版、あるいは、奈良で配達された大阪版か。一二版)一九五五年十二月四日朝刊、第七面「郭沫若文庫へ胸像 旧友林氏、思い出の作品を贈る」(ただし、大阪版、一四版にはその記事は見えない)。なお、この記事に掲載された写真は、冒頭に掲げたものと似ているが、やや構図が異なっている。

- (49) 菊地三郎「郭沫若先生・亡命十年の点描——沫若文庫」が語るそのころのこと「一二六——一二七頁に写真と翻字・書き下し文が見える。本稿の翻字は基本的にそれに従ったが、書き下し文は適宜改めた。

- (50) 元の趙孟頫「贈放煙火者」に「人間の巧芸 天工を奪ひ、葉を鍊り灯を燃やして清昼に同じ (人間巧藝奪天工、鍊藥燃燈清晝同)」とある。この『莊子』の語について、郭沫若は後に『十批判書』の中で次のように説明している。「常識では、飛んでいる鳥の影が地上を動くと考えられるが、実際は、飛んでいる鳥は動くのだけれども、鳥の影は瞬間瞬間、個々別々の投影の連続なのである。飛んでいる鳥がたびたび動

くと、光はただちに地面に達し、前の影はたちまち消え失せる。」(その

- (52) 澤地久枝「日中の懸橋 郭をとみと陶みさをその二」(『文藝春秋』一九八一年五月号(五十九巻五号)、後「完本 昭和史のおんな」(二〇〇三年七月)に再録)に詳しい。

- (53) 後に、自伝「帰去来」(上海・北新書局、一九四六年。未見)に収められる。「郭沫若全集 文学編 十三巻」四一四—四二八頁。

- (54) 『改造』には訳者名は記されない。今、丸山昇「ある中国特派員——山上正義と魯迅」(中央公論社、中公新書、一九七六年)一九五頁の説に従う。また、同書一九六頁に「時期から考えて、おそらく上海に行ってから手にいれたものを上海で訳して、『改造』に送ったのだろう」とする。

- (55) 林謙三宅のあった滝野川区は、昭和二十年(一九四五)に、幾度か空襲に見舞われたが、四月十三日から十四日未明にかけての被害が最も甚大で、焼失戸数は、約一万五千を数えたと言う(東京都北区役所編『新修北区史』東京都北区役所、一九七一年、五四〇—五四一頁。東京大空襲・戦災誌編集委員会『東京大空襲・戦災誌 第三巻』財団法人東京空襲を記録する会、一九七三年、二七六—二七七頁)。

- (56) そのほかの要因としては、林謙三自身が「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」において述べるように、内容が特殊であるため日本での発表が困難と感じていたことや、修正を要する箇所が多々あると考

えていたこと等が挙げられる。また、校正を通じて、郭沫若の意見が随所にとり入れられたと推測され、兩人の見解を峻別することが困難だったからとも考えられる。なお、林謙三には未発表原稿『唐楽調の淵源』（昭和十七—二十年頃執筆か。長屋礼氏蔵）があり、その内容は『隋唐燕楽調研究』と重なるところが多く、また、本書刊行後、明らかになったことについても記されている。当該草稿については、平成二十八年度中に刊行予定の長谷部剛・山寺三知編訳『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺（仮題）』（関西大学出版部）に収録されることになっている。併せて参照されたい。

(57) 澤地久枝「日中の懸橋 郭をとみと陶みさをその二」四〇六頁、財団法人アジア・アフリカ文化財団創立五十周年記念編纂委員会『沫若文庫目録』（財団法人アジア・アフリカ文化財団、二〇〇八年）七八—七九頁による。

(58) 藤田梨那「市川市郭沫若記念館落成」（『郭沫若研究会報』第六号〔総No.7〕二〇〇五年）を参照。

(59) 前述のとおり、「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」の別紙に「昭和三十一年四月十四日録音」と記されているが、ここに「それ以後やがて十八年になろうとしています」と記され、郭沫若の帰国の年、昭和十二年（一九三七）七月から数えると、昭和三十年（一九五五）七月が十八年目に当ることから、「昭和三十年四月」、つまり『文藝春秋』の随筆「郭沫若」と同時期のものではないかと思われる。

(60) 「林謙三先生年譜・業績目録」による。

(61) 『天理図書館善本叢書 月報15』（東京：八木書店、一九七四年三月）二頁。

(62) 長屋礼氏談。

(63) 陳夢熊「郭沫若遺簡五通考述」（『郭沫若研究』第十輯、一九九二年）所収「復丘瓊蓀」に「即林書，手中亦無有，幾乎全部忘却矣。」と見

える。「林書」とは、林謙三著『隋唐燕楽調研究』を指す。

(64) 表紙題字は、郭沫若。初版は、出版地・出版者・出版年ともに不明。二版は、敦煌文物研究所編、北京：文物出版社、一九五七年。

(65) 郭沫若の許可を得た旨を知らせる、中国科学院外事局からの書信が残されている。長屋礼氏所蔵。

(66) 「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」三一頁。

(67) 「郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』」三〇頁。

(68) 日本語訳は、『林謙三『隋唐燕楽調研究』とその周辺（仮題）』に収録されることになっている。

(69) その経緯については、長谷部剛・山寺三知「林謙三先生記念国際シンポジウム—隋唐音楽と日本雅楽—」を開催して」（『日本中国学会便り』二〇一六年第一号、六一—七頁）に詳述してある。参照されたい。ここでは概略のみを記す。筆者が、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「南北朝楽府の多角的な研究」（研究代表者：佐藤大志〔広島大学〕二〇〇六—二〇一〇年度）に研究分担者として参加していた際、佐藤大志、狩野雄（相模女子大学）、長谷部剛（関西大学）の三氏とともに、林謙三旧蔵書を調査する機会に恵まれた。その後、蔵書は、関西大学へ寄贈・移管されることになり、現在、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」（研究代表者：長谷部剛）の一環として、継続して調査・整理が行われており、筆者もそれに参加している。